

# 台湾結婚事情

横田 祥子

## ●はじめに

二〇〇四年から二年間、私は台湾中部の客家人地域に住み込みながら、フィールドワークを行った。当時、この地方都市に住む人々は、増え続ける国際結婚から派生する問題に困惑していた。国際結婚といっても、国籍の異なる男女が恋愛を経て結婚したわけではなく、専門的仲介業者の斡旋により、対面的関係になかった男女が数日間の見合いで結婚に至っていた。結婚するのは、台湾人男性と、中国・東南アジア諸国出身の女性であった。こうした国際結婚は、そもそも国家間の圧倒的な経済的格差を背景に成り立っており、その格差が夫婦間の権力関係にも暗い影を落としていた。台湾から女性の出身地への送金に關わるトラブルや家庭内暴力など、様々な問題が顕在化していた。私は、人々が強い

関心を寄せている国際結婚や家族を主な調査テーマに選んだ。ここでは、台湾のある農業を主産業とする地方都市の事例を中心に、台湾の国際結婚事情について紹介したい。なお、文中の年齢は調査当時ではなく、二〇一四年現在の年齢を示している。

## ●台湾における商業的な国際結婚

台湾では、一九七〇年代末から商業的な婚姻仲介業者の斡旋を経て、中国・東南アジア系女性と結婚する台湾人男性のケースが増加した。こうした国際結婚は、二〇〇三年には、全体の約三割にあたる五万四六三四件に上り、ピークを迎えた。その後、国際結婚申請者の台湾人夫側の扶養能力や偽装結婚を防ぐための審査が厳格化されたことで減少し、二〇一二年二

万六〇〇件へと推移している。

国際結婚の七八・九五%が、男台湾人、女外国人であり、妻の出身地は中国（含香港、マカオ）七〇・二二%、ベトナム一六・四一%、インドネシア四・四八%となっている。一方、妻台湾人、夫外国人の場合、出身地は夫中国二四・九三%、日本一五・六七%、アメリカ一五・六五%、タイ四・七九%となっている。

台湾人の配偶者となった外国籍配偶者の出身地をみると、夫が台湾人の場合、妻の出身国は台湾と比較して、経済力の劣る国々である一方、妻が台湾人の場合、夫の出身国の経済力は台湾と同等かそれを上回っていることがみとれる。このように「南の女性が、北の男性に嫁ぐ」ことを「グローバル・ハイパガミー (Global hypergamy)」という。女性は結

婚を機に経済的・社会的により上位の集団へ婚入するべきであるという要請がはたらくのは普遍なことだが、それがグローバルに展開しているのである。台湾で国際結婚が興隆したマクロ要因は、先進国同様、再生産労働に対する国内の需要が高まったことに加え、一九八〇年代末以降、台湾企業中国・東南アジアへの投資が増大し、その結果人的資源が台湾に還流したことにある。

国際結婚の相手としては、当初はインドネシア華人、フィリピン人、タイ人が多かったが、一九八七年に戒厳令が解除され中国大陸を訪問できるようになってからは、中華人民共和国の女性が増え、現在でも外国籍配偶者の約六割を占めている。他方、東南アジア出身者は一九九〇年代後半以降、ベトナム人女性が急激に増加し、人口数では中国に次いでいる。

## ●夫は海の方こうにノスタルジーを、妻は冒険を求めて

では次に、私の調査地の事例から、国際結婚カップルの様相を紹介していこう。陳氏(五八歳、男性、閩南人)は幼いころ小児麻痺に罹り、左足が不自由になってしまっ

た。成績は優秀だったので、鍼灸師を目指し勉強をしていたが、途中で挫折し家業の電器店を継いだ。第二人と財産を分与したのち、彼は住居兼店舗のビルを建て、新たに店を構えた。当時は、商売が繁盛して、海外旅行にもしょっちゅう行くことができた。母親が隣の医者が結婚したベトナム人の嫁を気に入り、息子にベトナム人との結婚を強く薦めた。

「友達とベトナムへ旅行しに行った時に、まるで子ども頃の台湾のようだと思った。台湾の農村の風景そのままだった。それに、ベトナムの女性は、自分が子ども頃の母親みたいだと思った。純情で勤勉で。もう一度旅行に行った時、友達と一緒に旅行のついでに結婚してしまおうかという話になった。それで妻を紹介してもらったんだ。」

ベトナムの、その一九六〇年代ごろの台湾の農村を思わせる風景と、幼少時の母親を彷彿とさせるベトナム人女性に憧れを抱くようになったという。そこで、彼は四四歳のときにカントー省出身のグエンさん（三八歳）と結婚し、娘一人（一三歳）が産まれた。

夫の「どうして台湾の男は、ベ

トナムの女が好きなのだろうね。ベトナム人と結婚する人は本当に多いね。」という無邪気を装った発言に対し、妻は「それはあんなに嫁の来手がないからでしょ！」と厳しく言い返す。彼女は、キン族の女性で、少し内省的

な、表情に憂いをたたえた女性である。彼女は、高校在学中に父親の商売が失敗し、学校に通えなくなった。高校中退後、職を転々とし、ホーチミン市の宝飾店で働いていたとき、ある男性と知り合い恋仲になった。しかし失恋してしまふ。「決して家計を助けるために結婚したわけではなかったの」とグエンさんはいふ。失恋し、自暴自棄となった時、当時大流行していた台湾人との国際結婚をして失恋を忘れようと、結婚の仲介してもらったという。「か八か、人生の賭けに出た」のだという。グエンさんに限らず、他のベトナム人女性、インドネシア華人女性たちも、このように自分の結婚を表現するのが好きだ。

結婚式で撮った記念写真には、真紅のウェディングドレスを身にまとい、怒ったような顔をした不機嫌な花嫁が、大勢の招待客の前に座っている。「そもそもやけで

結婚したようなものだったから、嫌になったら夫の家から逃げ出して台湾で働こうと思っていた。けれど義弟たちに長男の嫁として敬われたし、姑もよくしてくれたので、逃げ出すのは良心が痛んだの。」

二人の仕事は、夫が家電店の店番、妻は農作業の日雇いをしている。グエンさんは、まだベトナム国籍を保持したままにいる。通常、国際結婚をして四年後に中華民国国籍取得の申請ができ、五年目に取得が認められる。夫・陳さんは、今後の生活のためにひとつの戦略があった。景気の悪い台湾での生活に見切りをつけて、経済発展が見込まれるベトナムに移住したいと考えている。しかし、グエンさんは不毛な貧しい土地をようやく抜け出してきたのだから移住なんてとんでもないと考えている。一人娘によりよい教育を受けさせるには台湾にいたほうがよいが、老後の生活を考えると物価が安く経済発展目覚ましいベトナムのほうが、まだビジネスの可能性が残されている。二人の結婚生活は、台湾・ベトナムの経済、政治状況を考慮しつつ、次なる段階を模索している。

### ●「傳宗接代」よりも「親密な関係」を

台湾の男性たちが、仲介業者に斡旋を依頼してまで、国際結婚をしようとするのはなぜだろうか。理由のひとつには、結婚がなおステータスの証明であるからということが挙げられよう。結婚は、男性にとって何より財力の証明であり、セクシユアリティ面の充足を示している。また、東アジアで顕著な「男子を残して祖先祭祀を継承させる」という要請も理由のひとつである。台湾では、これを「傳宗接代」(chuan zong jie dai) といふ。

しかし、筆者の調査によると、当事者の動機は必ずしも男子子孫を残すことに限らないことが分かっていた。台湾でも「不孝有三、無後為大」(親不孝で最も甚だしいものは、後代を残さないこと)といわれているが、後代を残さないことを恐れているのは男性本人というより、その両親や周囲の人物であることが多かった。当事者の男性が初婚の場合は、一般的に想像されるとおり男子の出産が国際結婚の動機として挙げられることが多い。しかし、実際のところ、こうした国際結婚をする台湾人男

性のうち、その相当数が二回目、三回目の結婚をしようという人たちである。一度目は台湾人、二度目は外国人という事例が最も多く、二回ともベトナム人、あるいは一度目がインドネシア華人、二度目がベトナム人というような、もっぱら国際結婚という事例も珍しくなかった。それでは男子子孫を残すことが目的で、複数回結婚しているのかというと、決してそうではない。男子子孫を残すことにも、女性と親密な関係を築くことにこそ、重きが置かれているようである。

楊氏（五六歳、客家人）は水道局に勤める公務員である。二〇〇二年にアシュイ（三七歳、ベトナム・キン族）と結婚し、娘（八歳）がいる。楊氏は前妻との間に娘二人（二七歳、二二歳）がいる。前妻が一七年前に癌で亡くなった後、楊氏は男手ひとつで娘二人を育ててきた。二〇〇二年、同僚がベトナム人妻の母方イトコであるアシュイを紹介してくれた。楊氏は結婚の理由を次のように語ってくれた。

「私は『大老婆』(Da Lao Po、原義は正妻)が死んでから十数年間男手ひとつで娘を育ててきた。娘

たちも成長したし、そろそろ誰か連れ合いが欲しくなった。身の回りのことをしてくれる人が必要だからね。一から台湾の女の子と付き合うのは大変さ。投資しても結婚までたどり着けるとは限らないし、もうそういう恋愛は面倒だ。手っ取り早くベトナム人を娶ったわけさ」。

夫の発言を聞くと、妻のアシュイの顔はさつと青ざめた。彼女は結婚の動機について筆者に「私たちは会ってたちまちお互いこの人しかいない！と思つたのよ」と語ってくれていたからだ。結婚にロマンスを求める妻と、もはや求めていない夫との間に温度差がみられた。まだ若くこれから家庭を築いていこうという妻に対して、老後の連れ合いを求めている夫は、見据えているライフステージに大きな開きがあり、当然子どもについても意見を対立させた。

楊氏は『小老婆』(Xiao Lao Po、原義は妾、ここではアシュイのことを指す)には子どもを産んでもらいたくなかった。もう二人も娘がいるから。でも、彼女がどうしても自分の子が欲しいと主張したので仕方なく同意した」と語った。楊氏には、娘が二人いるが、息

子はいない。しかし息子が欲しくて国際結婚をしたのではない。彼自身が語るように、身の回りの世話を焼いてくれて、一緒に時を過ごしてくれる相手が欲しかったから結婚した。つまり、「親密性」を求めて国際結婚をしたのだった。

一方、アシュイのように、台湾人夫は子どもの出産を求めているものの、性別に限らず一人は子どもをもうけねばならないというのが、国際結婚をしたベトナム人、インドネシア人女性の間では常識になっている。一九七〇年代に台湾漢族の親族や婚姻を研究したマージョリー・ウルフの言葉を借りると、女性は子どもを出産してこそ、婚家において安定した地位を得ることができるのかもしれない。また、夫と生物学的につながりのある子どもは、財産分与の権利を得ることができる。それは、母親にとっても生活保障となる。台湾人夫の年齢は、彼女たちより約二〇歳も年上であるので、夫が冥界へ旅立つ日も彼女たちよりもずっと早い。夫の死後、あるいは自分の老後の保障としても、財産を分与される子どもが必要なのである。彼女たちは、出身社会は異なるとはいえ、経験的にその論理を

わきまえていて、子どもを持ちたがらない台湾人夫を最終的には説得していく。

### ●国際結婚の仲介システム

見知らぬ男女を結び付ける国際結婚の仲介システムは、どのような仕組みになっているのだろうか。台湾各地には、無数の仲介業者があり、それぞれ中国・東南アジア諸国の仲介業者と連携しながら男女を斡旋している。男女の引き合わせは、男女一方を相手の出身国に連れてくる形式をとるが、男性が女性の出身地へ赴くことが多い。台湾側仲介業者が、台湾人男性数人をつれて女性の出身地へ行き、ホテルや現地側仲介業者の家などに宿泊する。そこで、花嫁候補の女性と面会し、気に入った人物と通訳を介して互いについて理解を深める。相手が決まれば、近隣の観光地を訪れ、一緒に時を過ごす。両者が結婚に同意すれば、女性の親族に挨拶に行き、婚資の内容を交渉する。そのあと、現地のレストランや女性の家で披露宴を執り行う。そして結婚登記を現地戸籍事務所済ませた後、経済文化代表処(大使館に相当)にて行う。後日、経済文化代表処にて

面談が行われ、偽装結婚の是非、夫の扶養能力の有無などが審議される。問題がなければ、配偶者ビザが発給され、妻となった女性は台湾へ渡航し、結婚生活が始まる。

仲介費用は、基本的には台湾男性側だけが負担する。しかし、ベトナム人女性の場合は、仲介業者に約二〇〇〇ドルを支払うという調査報告もある。筆者の調査によると、台湾人男性は仲介業者に約二五〇万新台湾ドル（約八二〇万円）を支払う。このなかには、男性が女性と会うための渡航費、宿泊費、仲介業者へ謝礼、披露宴費、女性側に贈る宝飾費、結婚後の女性の教育費、渡航費、仲介業者から女性親族に贈られる謝礼などが含まれる。

国際結婚の費用は、台湾人同士の場合に比べて高額なのだろうか、それとも低額で済むのだろうか。筆者が二〇〇六年に結婚した事例を比較したところ、国際結婚の場合、結婚時に贈与される金品の総額は、台湾人同士の結婚に比べると五・七〜八・三%にとどまった。しかしながら、国際結婚の場合、結婚後も長期にわたり妻の生家へ送金することが一般的であるので、婚資の分割払いをしている

とも解釈できる。また、外国人女性配偶者は、台湾人女性ならば求められる持参財を贈らないので、一見男性側ばかり贈与しているかのようである。これは、女性側が「得をしている」ように思えるかもしれないが、そうではなく女性側は男性側に対して負債を増大させていることになる。国際結婚では、こうした負債の返済として結婚生活を送り続けることが、夫婦関係の維持につながっているのかもしれない。

ところで台湾政府は、二〇〇七年に営利目的の婚姻仲介を禁止した。仲介システムが人身取引を招く危険性が極めて高いことから、台湾政府は謝礼の授受を禁止することで、人身取引の防止に乗り出した。しかしながら、その効果がいかにどのものか、筆者にははかりかねる。二〇一一年にインドネシア西カリマンタン州において、三〇年間台湾へ華人女性を送り出してきた「老舗の」仲介業者にインタビューした際には、台湾政府の政策の変化による影響はみじんも語られなかった。彼らにとって台湾人は依然「得意客」であり、毎年一〇〇人ほどの華人女性を台湾へ送り出している。仲介業者は、

政策の網の目をくぐって、相変わらず斡旋を続けているものと思われる。

●むすびにかえて―やはりロマンチック・ラブが欲しい！

本稿では、どちらかというと台湾人男性側に立ち、国際結婚の様子を紹介してきた。最後に台湾人男性と結婚したベトナム人、インドネシア華人女性の側から語られる国際結婚について述べておこう。仲介業者の斡旋による国際結婚は、ロマンチック・ラブで始まったとは言い難い。しかし、女性たちは「電撃的に恋に落ちたのよ」と恋愛のイデオロムを用いて、台湾人夫との出会いを表現する。彼女たちも恋愛という糖衣なしでは、結婚生活を送れないのかもしれない。

女性たちは一〇代後半〜二〇代前半という若さで、台湾にやってくる。「何が心残りかって、一度も恋愛をしたことがないことよ」（三二六歳、ベトナム人、九歳の娘がいる）という。ベトナム南部出身のアパイによると、少女時代、日本というところの「家事手伝い」として働かず家にいることが、良い縁談に恵まれる道だとされてい

た。そして未だみぬ王子を待っていたある日、台湾人との見合い話が舞い込んできたという。そんな箱入り娘が結婚した相手は、三度目の結婚だった。結婚後は台湾での生活に適応し、自立して送金のためのお金を貯めようと勤勉に働いてきた。今、果たして「夫を愛している」のか分からないという。夫婦は仲睦まじくみえるのだが、「愛している」というのとは違うという。恋愛の欠如は、後々、どうにも埋めがたきものとして意識されるようだ。恋愛のプロセスを省略して、「親密性」を手に入れたかった台湾人男性と、改めて「ロマンチック・ラブ」を求める女性たち。最終的には「親密な関係」を求めているうえで、両者の思惑はそう遠くはないものの、省略されたプロセスの不在は大きいようである。夫婦の間で、「親密な関係」をめぐるどのように妥協点をみいだしているのだろうか。また国際結婚を通じて誕生した夫婦が、どのような家族像を作り上げていくのか、今後も注目していきたい。

（よこた さちこ／滋賀県立大学 人間文化学部助教）